

エ イ コ ス

— 十七世紀フランス演劇研究 —

XIII

アンティゴヌ、最後の事件

浅谷真弓 (1)

フランス演劇関係古文書資料一覧：1607-1611

戸口民也 (18)

Mithridate ou le double regard

Yoshiko HAGIWARA (37)

アンティゴヌ、最後の事件

浅谷真弓

はじめに

ロトルーは古典古代作品に取材して、『メネクム』(1630/1632)、『死にゆくエルキュール』(1634)、『ふたりのソジー』(1636-37/1637)、『アンティゴヌ』(1636-37/1638)、『捕虜たち』(1638/1638)、『イフィジェニー』(1639/1640)の六作を書いている。こうして並べてみると、1629年から1649年までの全創作期間中、前半十年に喜劇と悲劇が交互に現れることがわかる。喜劇は、生き別れのメナエクス兄弟、奴隷ソシウスとメルクリウス神、捕虜となった兄弟、主人と奴隷など、さまざまな位相の下に取り違えの妙を見せた。この世に「わたし」はたったひとり、という当たり前のように聞こえるテーマに挑んだ作者は、カードゲームの興奮の中で、札の表裏に隠された見えざる神の手に触れたのかもしれない1)。哲学的論文、対話ではなく、詩や物語でもない、舞台でしかできないこと。古典古代喜劇がこの作者に与えた演劇の可能性と限界は最後の喜劇、『妹』(1642-47)となって現れる2)。喜劇作家ロトルーの死は多くの相続人を前に、過渡期の一人として応分の努力をした末の大団円と評価すべきところだ。では、形式上でさえ、永年にわたって悲喜劇との曖昧な境界をさまよいつづけた悲劇はどうか。死にゆくエルキュールが幕開けを告げた後、古典中の古典、定番、アンティゴヌが登場する。彼女の振り返った先にはセネカ、エウリピデス、ソフォクレスがいる。これらの名前が何を意味するか、余程の脳天気でない限り、劇作家なら誰でも知っている、そういう時代に生きて、最初の挑戦だからと言い訳のきかない立場に身を置いた。アンティゴネは悲劇作家の資格を試すには相手に取って不足のない対象、それどころか失敗すれば次がない、最後の作品となるだろう。ロトルーの古典古代悲劇第二弾、『アンティゴヌ』は誰のためでもない自分自身のプライドを賭けた、しかし、笑うべき無謀な挑戦だったのか。

I. オエディプスのディレンマ

ヴィオレール・デュックによれば、アンティゴヌは、ソフォクレスの『アンティゴネ』とエウリピデスの『フェニキアの女たち』の古典古代的単純さに飽き足らなかった作者が、セネカの『テーバエの女』(邦訳、『フェニキアの女たち』)の力を借りてフランスの舞台に登場させたことになっている3)。詳細な比較検討は先行研究に譲り、ここで四作品の簡単な対照表を作っておこう4)。

エイコス XIII

登場人物

ソフォクレス: アンティゴネ、イスメネ、クレオン、ハイモン、ティレシアス、エウリディケ、しらせの男たち、コロス

エウリピデス: アンティゴネ、イオカステ、オイディプス、ポリュネイケス、エテオクレス、クレオン、メノイケウス、ティレシアス、老僕、コロス

セネカ: アンティゴナ、イオカスタ、オエディプス、ポリュニケス、エテオクレス、しらせの者、侍臣

ロトルー: アンティゴヌ、ジョカスト、エテオークル、ポリニース、イスメヌ、クレオン、エモン、ティレジー、アルジー、アドラスト、その他

共通関係図

第一世代

第二世代

オイディプス

エテオクレス ポリュネイケス アンティゴネ イスメネ

イオカステ

クレオン

メノイケウス

ハイモン

エウリディケ

アドラストゥス

アルゲイア

ティレシアス

開始時点

ソフォクレス: オイディプスが長年の流浪の末に昇天、アンティゴネは妹イスメネとテーバイの都に戻った。イオカステも既に亡く、エテオクレス、ポリュネイケス兄弟は王位争いで死んだ。クレオンの長子メノイケウスがテーバイの犠牲になった、それから

エウリピデス: エテオクレス、ポリュネイケスの兄弟対決の最中。オイディプス、イオカステは未だ存命

セネカ: オエディプスのアンティゴナに対する昔語り。次の場面でイオカスタが登場し、彼の失踪から三年経過したと言う。兄弟対決のはじまり

ロトルー: エディプは既に亡い、兄弟対決のはじまり

終了時点

ソフォクレス: アンティゴネの処刑に続くハイモン、エウリディケの自殺

エウリピデス: ポリュネイクスの埋葬拒否、オイディプス、アンティゴネの追放、亡命

セネカ: エテオクレスの呪われた王権相続、来るべき破滅の予言

ロトルー: アンティゴヌ処刑、エモン自殺

経過

ソフォクレス: 1/アンティゴネ、イスメネ現状説明、アルゴスが去った後、ポリュネイクス埋葬拒否、エテオクレス埋葬 2/クレオンによるポリュネイクス埋葬拒否の正当化、アンティゴネによる秘密の埋葬 3/埋葬発覚、姉妹の処刑決定 4/ハイモンとクレオンの葛藤 5/アンティゴネ処刑、ティレシアスの予言、ハイモン、エウリディケ自殺

エウリピデス: 1/イオカステ現状説明、アンティゴネ、ポリュネイクス、エテオクレスの対決、女たちの仲裁 2/クレオンの対アルゴス戦況報告、ティレシアスの予言 3/メノイケウスの自己犠牲 4/アンティゴネの仲裁、兄弟の死、イオカステ自殺 5/オイディプス追放、アンティゴネ亡命

セネカ: 1/オエディプス現状説明 2/オエディプス失踪から三年後、イオカスタ現状説明 3/アンティゴナとイオカスタが兄弟を説得、仲裁、ポリュネイクス再出発、エテオクレス呪われた王権相続

ロトルー: 1/ジョカスト不吉な目覚め、アンティゴヌ戦況報告、メネセの死のレシ、エテオクルとクレオンの葛藤、ポリニースをめぐるアンティゴヌとエモンの葛藤、ポリニース、アルジー夫妻の別れ 2/ポリニース、アンティゴヌ、エテオクル、ジョカストの葛藤 3/ジョカスト自殺のレシ、エモン、アンティゴヌの嘆き、アンティゴヌ、イスメヌ姉妹の対立、アルジー、アンティゴヌの対面、同調 4/クレオンの相続の正当化、アンティゴヌ、アルジーの謀反 5/エモン、クレオンの対立、ティレジーの予言、アンティゴヌ処刑、エモン自殺、クレオン昏倒

主要問題と決着方法

ソフォクレス: 埋葬をめぐるアンティゴネとクレオンの対立/アンティゴネ処刑

エウリピデス: 1) 兄弟対決、2) 埋葬をめぐる対立/兄弟の死、オイディプス父娘追放

セネカ: 兄弟対決/亡命、相続

ロトルー: 1) 兄弟対決、2) 埋葬をめぐる対立/兄弟の死、処刑、自殺

付随的事情

ソフォクレス:対アルゴス戦、アンティゴネとクレオンの息子ハイモンの恋愛関係

エウリピデス:対アルゴス戦、クレオンの長子メノイケウスの自己犠牲、アンティゴネ、ハイモンの恋愛関係

セネカ:オエディプス失踪

ロトルー:対アルゴス戦、メネセの犠牲、アンティゴヌ、エモンの恋愛関係

ざっと眺めれば、『アンティゴヌ』は登場人物、物語の構成ともにエウリピデスにその殆どを負っている。構成上単純なのはむしろセネカで、人物数が端的に示すように、兄弟の対立が母娘の仲裁によって亡命と相続として平和的に解消される。少なくとも舞台上で死者が出ることはないし、死のレシもない。時間に沿って並べて見よう。

1 行目:場面設定、街道の道すがら

オエディプスの昔語りアンティゴナの三度の相槌を交えて、登場から 318 行にわたって続く。次の同記事実をアンティゴナの相槌をきっかけに四度、他の表現で重複的に述べる。1)これから向かう死地の来歴を含めた描写、2)自分が過去に犯した罪、3)その結果生じた現在の不幸。この繰り返しには、韻文技術の見せびらかし、コードが不完全な観客の説得、老人の特性の描写などの効果が考えられる。四度目のオエディプスのセリフが知らせの者の登場を準備する。

87 行目:ウェルギリウス、『アエネイス』の引用、唯一の救いは救われないこと。敗者にとって、命を救われないこと、死の方が生の苦痛を味わうより解放、救済となる 5)

318 行目:知らせの者の報告

現在のはじまり、筋の展開とともに、オエディプスの不吉な予言、退場

363 行目:場面転換、城壁のうえ

イオカスタの昔語りはオエディプスの語りを彼女の側から補強、修正する事実確認で、実質的には同じ内容をまた繰り返される

387 行目:侍臣の現状報告

406 行目:アンティゴナの仲裁のすすめ

426 行目:イオカスタ退場

444 行目:場面転換、野营地、イオカスタの説得開始

476 行目:ポリュニケスの返答

480 行目:イオカスタの説得、昔語りと現状の嘆き

496 行目:エテオクレス、無言で剣をおさめる

497 行目:イオカスタの説得続行

586 行目:ポリュニクス再返答

599 行目:イオカスタの裁定

亡命者ポリュニクスには新天地を求める戦いを、エテオクレスには王位を与える。オエディプスの逆説、救われないことが唯一の救い、が想起される場面。祖国から追われたように見えるポリュニクスは呪われた王国の軛から解き放たれ、自由を得る。戦って勝てば名誉は自分のものである。一方、王位を相続するエテオクレスは権力とそれに付きまとう憎しみをも父から受け継ぐ。王位継承の事実に限っては救われたように見えるが、破滅が予言されているため、この救済は来るべき不幸の同義でしかない。名目上の罰(追放)が救済であり、同じく救済(相続)が厳罰となる。以下、最終行までイオカスタとエテオクレスが権力と憎しみをめぐって交わす対話がこのことを論証する。

660 行目:イオカスタの結論、憎まれる権力は永続しない

665 行目:エテオクレスの結論、権力はどんな代価を払っても見合う

イオカスタの主張がオエディプスの破格に長いと思われるプロローグによって補強されていることはまちがいない。既にイオカスタは二代にわたって空位時の王の代理人を務め、ドラマの中ではオエディプス退場後、実質的に彼の役を演じてきた。エテオクレスの破滅の未来はオエディプスが既に生きた過去が実証している。呪われた権力は相続され、循環するだろう。オエディプスは自身の不在、積極的不介入によってドラマの原動力となり、圧倒的な存在感を示すことになる。ここで再び観客はウェルギリウスの引用、救われないことが唯一の救い、に連れもどされる。直感的には把握可能なこの詩句の意味は論理的には多少複雑である。いま、一般論を a、オエディプスの価値判断を b としてその道筋を整理してみると、

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| a 1 生きることは良いことだ | b 1 死は望ましい |
| a 2 最大の処罰は死である | b 2 最大の処罰は生である |
| a 3 処罰は報復である | b 3 処罰は償いである |
| a 4 = b 1 死は望ましい | b 4 = a 1 生きることは良いことだ |
| a 5 = b 2 最大の処罰は生 | b 5 = a 2 最大の処罰は死 |

オエディプス自身の罪の評価が死をもって贖う限界を越えている(これを b 0 とする)ため、死はむしろ救済と同義であり(b 1 ウェルギリウスの引用)、救済されないこと、すなわち生きることが最大の処罰である。しかし、敬虔なアンティゴナの説得を受け、自殺を思い止どまった彼にとって処罰は償い(b 3)でもあるから、苦悩の分だけ救済に近付くことができる。次に、処罰の意図を一般論に置いてオエディプスを罰する(a 3/a 4)なら、a 2の結論を選ぶべきだが、それではみすみす b 1の願望をかなえさせてしまう。どちらに

しろ、オエディプスは救済されてしまう。a bの二重規範を満たし、循環を断つ方策がないことは上に見たとおりで、同じく、エテオクレスの主張をA、イオカスタの主張をBとすると、

- | | |
|-----------------|-----------------|
| A 1 エテオクレスは正しい | B 1 エテオクレスは不正だ |
| A 2 エテオクレスには報酬を | B 2 エテオクレスには罰を |
| A 3 王位は良いものだ | B 3 王位は呪われている |
| A 4 繁栄の約束 | B 4 破滅の予告 |
| A 5 エテオクレスには王位を | B 5 エテオクレスには王位を |

であり、B 5 = A 5 が A 1 を阻止するには、B 3 / B 4 が確実でなければならない。仮に、イオカスタ = オエディプスを根拠にして A B を a b の枠のなかで解消するならば、a 1 生きるとは良いことだ、が A 3 王位は良いものだ、に代入できるだろう。B 1 / B 2 にならって王位を与えない決定を下すと、b 1 死は望ましい、と同様の結果を生む。オエディプスが死を経ずに救済に近付くためには、より長く生きて償う必要がある (b 3 / b 4) から、償いの代理人を立て、a 5 = b 2 = B 5 エテオクレスには王位を、が最良の選択となる。エテオクレスは論理的にもオエディプスの相続人に指名される。勿論これは仮定の話にすぎないが、このような論理上の操作を構成の単純さと対比的に捉えることは可能だろう。説得的であり、かつ二重規範になじむこと。『テーバエの女』は未完成を疑われ、レーゼドラマの側面を持つ作品であるが 6)、オエディプスのディレンマをイオカスタ、エテオクレスの論争に導入した場合には、彼の救済をめぐる論証として一応の完結をみる。言うまでもなく、読者にとっては冗長でしかない三度ないしは四度にわたるオエディプスの昔語りや舞臺で果す役割は変質する。全体が来るべき不幸の予告編に終始する印象は、事件発生を回避しながら、見る者の論理にきわめて具体的に訴えかける戦略の結果なのだ。恐怖の根源は死の周辺に準備されて到達できない。オエディプスとエテオクレスの舞臺上の身体を越えて先送りした救済が観客に託される時、生きながら残虐な苦痛を味わい、未知の脅迫を受ける相続者が現れる。登場人物の殆どが死んでしまうロトルーの『アンティゴヌ』とは、このような意味で、まったく対照的である。

II. ポリネース ≠ ポリュネイクス

セネカのアンティゴナは構成上は単純明快、論理的には多少複雑であるものの、舞臺作品の体裁を保つに足る要件を備えていた。しかし、これでは校訂者がロトルーをセネカの相続人に指名した理由はいまひとつ釈然としない。エウリピデスは登場人物数がほぼ同じ、構成は複合的で、それだけに全体として筋が整備され、論理が通っているように見える。それに物足りなさを感じて、ソフォクレスのポリュネイクスの埋葬問題に重点を移して再構成したというのなら、納得できる。改めて『アンティゴヌ』の構成要素を整理しておこう。

1) ソフォクレス、エウリピデスによる要素

- 1 劇の開始時点でオイディプスは死んでいる ソフォクレス
- 2 エテオクレス、ポリュネイクスは兄弟対決のさなかにある エウリピデス
- 3 イオカステは生きていて、兄弟の仲裁をする エウリピデス
- 4 ティレシアスの予言とメノイケウスの自己犠牲 エウリピデス
- 5 兄弟の死 エウリピデス
- 6 それに伴うイオカステの自殺 エウリピデス
- 7 ポリュネイクスの埋葬をめぐるイスメネとの葛藤 ソフォクレス
- 8 ポリュネイクスの埋葬をめぐるクレオンとの対立 ソフォクレス、エウリピデス
- 9 アンティゴネとハイモンの葛藤 ソフォクレス
- 10 ハイモンとクレオンの葛藤 ソフォクレス
- 11 クレオンの王位継承 ソフォクレス
- 12 アンティゴネの処刑 ソフォクレス
- 13 それに伴うハイモンの自殺 ソフォクレス

2) ソフォクレス、エウリピデス、セネカにあって、ロトルーにない要素

- 1 オイディプスの予言、その他 エウリピデス、セネカ
- 2 オイディプス、アンティゴネの追放、亡命 エウリピデス
- 3 ポリュネイクスの亡命 セネカ
- 4 エテオクレスの相続 セネカ
- 5 エウリディケの自殺 ソフォクレス

3) ロトルーに固有の要素

- 1 ポリニース、アルジー夫妻の別れ
- 2 アルジー、アンティゴヌスの対面、同調
- 3 クレオンの昏倒

前半をエウリピデスに、後半をソフォクレスに負う構成を難点とする 1)か、大団円の説得性を高めるために絶対に必要な手続きと考えるか、意見が分かれるところだろう。どちらにしても、構成要素を見る限り、セネカの入り込む余地はない。ラテン語で書かれたセネカを第一に置いて、その悲劇としての存立に疑問を抱き、エウリピデス、ソフォクレスへとさかのぼったのであれば、話は別である。『テーバエの女』は未完成なレーゼドラマで、舞台上で演じるには不適格な作品だと思われる。この時点でのセネカの名誉は最初の教師であることにすぎない。だが、セネカの要素を内包するエウリピデスだけでも、ロトルーの悲劇を満たすことはできなかった。そして、アンティゴヌスの悲劇はエウリピデスとソフォ

クレスを強引に結び付ける人物の力なしには成立しない。ラテン名ポリュニクス、ギリシア名ポリュネイクス、フランス名ポリニースと名乗る彼が演じた役割は。

ギリシア人はエテオクレスを権力者、専制君主とし、観客の同調をポリュネイクスに置いた。フランス人は前者を民衆に愛される人道的な王、後者を真に忌まわしい人物に仕立てた。これが校訂者の評価である。ロトルーが却下したローマ人のポリュニクスも母親の意見に従えば、王国の呪いを継がせるに忍びない人物だった 2)。

第一幕、第六場に登場するポリニースは義父に向かってテーブの王位継承権を主張し、宣戦布告の正当性を論じる 3)。

それがわたしだ、みすばらしい奴、それがあなたの国でのわたしなのだ、あなたは多くの実力者たちを平穏に束ね、悪しき間借り人のわたしは呪われた土地から恋の名の下に戦いの種をもたらした。あなたの家とわたしが共に掲げた婚礼の炬火は運命に火を点け、あなたがたのすべてを燃え尽くす。あなたは娘の胸に蛇を抱かせ、そいつがあなたの一族を絞め殺すにちがいない。多くの善意、忍耐に報いるに、あまりに卑怯だったわたしは、多くの災いの元凶となった、もうご好意は無用です。後はない、あなたを満足させる時が来た、そして兄とわたしの戦いが最後に、、、なぜそんなふうに着せ、震えているのです

戦いに至る事情はこうだ、

- 1) ギリシア(アルゴス)がテーブの脅威となった原因はひとりポリニースのみにあり、
- 2) 亡命者であった彼を受け入れてくれた義父一族にこれ以上の迷惑をかけたくない、
- 3) 好意に甘んじて生きて行くことはプライドが許さない。

だが、すべては妻、アルジーへの恋に始まる。義父はそんな媚を諫め、妻も反対する。

なんだと、何を言い出すのだ、恐ろしい企てだぞ

ああ、あなた、お生まれの声に耳を傾け、ご自分が流そうとしている血がどんなものかご覧なさい、恥も恐れもなく、そんなことをお考えなの

そこで再び、

わたしたちは共同統治の合意を尊重する取り決めだった、裏切り者がそれを犯して処罰されぬままだ、わたしは長幼の序をまもっている、わたしの器はこんな意気地の無い徳を湛えられない、よほどの腑抜けでない限り、そんなことには耐えられまい。いかに気掛かりなアンティゴヌも、わたしの意志を曲げられないだろう

第四の理由は不正を糺すこと。そして、彼は妻を抱き締める。

さようなら、わたしの心がやさしく愛し、天に類い稀な徳を与えられた方よ、永遠の別れがわたしたちを分つだろう。あなたはご自分の苦しみを断つ気概を見せて、わたしに涙を流すような恥をかかせてはいけない。そしてお義父さま、年経て賢明なあなたには別の媚がふさわしいが、せめてわたしの遺骸を土で覆うお心遣いを、死者たちの王国へ抜ける道を開いてください、わたしのからだがかラスたちに盗まれぬよう。どうか、姫さまを大切に、

ギリシアの中でつりあう方を探してあげてください、その結婚が心地よいものとなろう、最初のそれが姫にもあなたにも悲しいと同じに次にポリュネイクスの言い分を聞いてみよう 4)。

- 1) 義父が彼の帰国を誓い、
- 2) 兄が先制を仕掛け、
- 3) 彼は最も近しい者の挑戦に応じてやむなく槍を取った。
- 4) 追放の身の情けなさは同じ、
自由にもものが言えず、権力者の愚行に耐え、貧困に喘いできた。
- 5) 富を求めて何が悪いだろう。
- 6) 実の父の呪いを避けるため、一年毎の共同統治を決めながら、裏切られた。

しかし、妻であるアルゲイアは名前さえ触れられていない。

- 1) 獣のように奪い合ったすえ、
 - 2) 結婚は義父が神託によって認めた。
- 遺言は母にして姉であるイオカステに、

母上、われわれの命運は尽きました、わたしを祖国の土に埋めて下さい、あなたの手でわたしの顔を閉じさせてください

ポリュネイクスとはいえば、亡命の苦難は当人でなく母親の口を借りて述べられ 5)、

もはや自然の掟にはなんの力もありません

と断ずる。亡命の身のみじめさ、不正への怒りは共通でも、ポリニースだけが国家間の紛争の火種である自分を妻と義父から引き離そうとしている。ギリシアにはいくらでもふさわしい夫、婿がいるだろう。ギリシア人、ローマ人との決定的な違いはふたりに対する愛情の有無である。

	ロトルー	エウリピデス	セネカ
結婚の理由	恋愛	神託、貧困	貧困
妻の性格	類い稀な 美德を備えた	不平はない	裕福、勝手気まま 情け容赦ない
義父の性格	賢い、義に厚い 善意、忍耐	野心的 誤った好意	横柄 奴隷扱いする
遺言相手	妻、義父	実母	(実母)

このポリニースを真に忌まわしい人物と評価した校訂者に賛同するなら、

- 1) プライドばかり高く、

- 2) 婚家のためだけを考え、
 - 3) 女ひとりと引き換えに祖国を売り、
 - 4) 親の情を知らず、長幼の序を弁えない愚か者
- ということになる。だが、裏返せばすぐにわかるように、
- 1) 貧困に負けることなく生まれに見合う誇りを保ち、
 - 2) 生まれ(自然)より、恋と恩情の契約で結ばれた誓いを取り、
 - 3) 正義のために敢えて祖国に弓を引いて、
 - 4) 自分が死ぬことで紛争を決着しようとした

のではないか。でなければ、何故、妹、アンティゴヌをこれほど苦しめることができるだろう。彼がつまらない反逆者、兄殺しなら妹の嘆きはただ埋葬が兄妹の情に背く、それだけの理由にかかる。妹にとって、慕われつつ国を治める長兄よりなお、彼が愛すべき人だからこそ、失われることを恐れ、亡くした後の悲しみが深いのではないか。ポリニースにあってエテオクルにないものは何か。妹もまた、こののち敵対者の息子となるエモンを恋する身である。ソフォクレスのアンティゴネにはハイモンがいた。当然、妹は義姉、義父への遺言を知らない。しかし、兄がどんな人物であるかは知っている。義姉、アルジーの嘆きはアンティゴヌの嘆きに反響する 6)。

ポリニース、お父さま、あの薄情な方を止めて、あの方が定められた死の時を遅らせて、せめて別れを惜しむいとまがあるように、そうしなければならぬ。涙もためいきもいらない、声を押し潰してしまうから

第二幕、第二場、城壁の高みから兄を認めて声を上げる 7)。

ポリニース、もっと前へ、顔を見せて、一年もたってからやってきた妹を許してください、不幸せなわたしにほかに手だてはあるのでしょうか、どんな因果でわたしたちはこんなに隔てられているのでしょうか、妹がようやく兄にまみえたというのに、つきなみな挨拶さえできない、ただ一度、抱き合うことも許されぬとは、まるで敵同士のように話している

エテオクルと同等の分別をもって、プライドと正義、理性を盾に長兄を糾弾するポリニースに、再び、

不幸せなわたしがひざをついてお願いするのです、ご自分のためではなく、わたしのためを思って、どうか

兄の答えは妻への答えに似る。

この世に心残りがあるとしたら、あなただけがそれを取り除いてくれよう。愛しい妹、むしろわたしを罰するがよい、わたしの気持ちが意に添わぬと言われるよりはまし、来てわたしからこの剣を取り上げ、そうだ、来なさい、すぐさまこれでわたしの胸を突き、死なせ

てくれ、あなたに対するわたしの敬意は墓にまで及ぶだろう、わたしは生きて仇を打つことはできまいから

エウリピデスとセネカの、プライド、正義、家族の血にまみれた悲劇は恋愛感情と恩情に報いることなしには正当化されない。生きているポリニースは恋する人としてアンティゴヌの同調を受け、悲劇の前半を彼女のものとし、後半、ソフォクレスに倣いつつ、兄亡き後の妹の悲恋をその不在、欠如によって導いて行く。彼の果たした役割は単なるつなぎ目ではない。悲劇の全体をアンティゴヌの恋愛に注ごうとすると、どうしても必要な存在だったのだ。そしてエウリピデス、セネカは名を呼ばず、ソフォクレスは触れさえしない妻が妹に決別の意味を伝えにやって来る。妻はアルゴスの王女アルゲイアではなく、アンティゴヌの義姉、アルジーと名付けられた。

III. アルジー/アンティゴヌ

アルジーは、構成要素を先行三作品に对照して、3) ロトルーに固有の要素のうち 1/2 にかかる人物で、作者が特に舞台に乗せるだけの価値があると認めた女性である。レシの文中に示すのでは足りず、アンティゴヌの同調を呼ぶ、恋する人ポリニースの恋を語らせるために身体を与えられた。セネカは息子たちの仲裁にむかう最も不幸な母親、イオカスタにこう言わせている 1)、

自分が罪ある者であることは、それほど罪深いことではありません。このわたしは、自分以外の人間をも罪ある者にしてしまったのです。いえ、そのことも、まだ軽い罪。わたしは罪ある者を生んだのです。が、わたしの苦難の数々に、ひとつ欠けていたものがあります、敵となった人を愛するという苦難が

その苦難が時を経てアルジーに科せられる。夫は亡命者であったが、紛争の火種となる敵国の王位継承権がやむなくそうさせた。アンティゴヌの恋はアルジーの恋によって予め失われてしまった。第三幕、第六場、短すぎる別れの時に、涙とためいきで言葉をなくした彼女が語り始める 2)。

夫から命を奪う同じ死神が、わたしにはそれを求めぬか。並外れた不幸にあった自分の半身をカラスどもにさらし、死者に鞭打つ非道に従えと。既にポリニースはわたしを責めているにちがいない、いまさら名誉を受けられようか、人が拒んだものを。もしあの方がふさわしい扱いを受けぬとなれば、わたしが責めを負う、けれども時機を逸していま受けるのも、わたしの過ちなのです

愛しい方、なきがらに寄り添いさまよう霊がまだそこにいるなら、この務めを果せるよう、わたしを導いてください。ポリニースがポリニースを見いだせるように。あなたに会いたい、それだけでこの不吉な場所に来ました。もう一度、お姿を見せて

目の前に悲しみの現実が生きて、声を発する。第七場、明かりを差し出した暗闇の先にまだ見ぬ義妹、アンティゴヌが立っている 3)。

だれか死んだ人を嘆いているの、おなじ気持ちでやってきたのね、クレオンの怒りを避けて。それなら障りはない、名乗りましょう。ポリニースの昨日までの妻、今日は夫を亡くし、夜陰に乗じて最後のお務めを果しに来ました

義妹は夫の代わりに彼女を抱き締める。

アルジー、お義姉さまなのね、何というめぐりあわせでしょう、兄に会えぬ今となって、こうしてお目にかかる、むしろ悪い方へ定められているのでしょうか。兄はこの偶然をよろこんでくれるだろうに、義姉妹たちは。生きているあいだは隔てておきながら、死んだ後になって結び付ける。わたしの心は兄があなたをどんなに恋していたかわかっていたのに、あとに残され、妻でなくなって、やっと会えた。お引き合わせは同じ務めを果すため、アンティゴーヌの気持ちはアルジーに通じている

やがてアンティゴーヌは同じ言葉をエモンに言わせることになるだろう。それを知らず、今はポリニースの霊がふたりを夫、兄の代わりに抱き合わせる。アルジーはアンティゴーヌにとって死んだ兄の分身であり、アンティゴーヌはアルジーにとって夫の分身であるが、同時に、敵対者を愛する者として重なり合う。義妹を評してアルジーは、

亡くなってしまったというのに、そのお姿がある。まだあの方のなにかがしが生きて目の前にある、からだは同じお腹で育てられたのです、あなたがたはひとつの心、ひとつの魂、ひとつの血だった

だからアンティゴーヌの答えはポリニースの答えである。

お兄さまが亡くなってわたしがつらいのはゆえなきことではありません。生まれにまさって愛情こそがわたしたちを結び付けていたのです

だが、対面はクレオンの出現で早々に打ち切られ、ポリニースの遺骸を求めて退場する。

参りましょう、お兄さまに涙のお弔いを、わたしの血であった方に

わたしの魂であったあの方に

第三場、次に登場する時、それぞれ別の紐を寄り合わせて一本の縄を縋うように、ふたりは台詞を分け合い、接いでいく 4)。

いいえ、陛下、わたしは捕えられはしましたが、それを恐れてなどおりませんでした。正しい行いをするのに恐れる必要がありますでしょうか

非道な取り決めに背いたのはわたくしひとり、陛下、姫さまはお手を添えられたにすぎませんわ

まさしく、王たちに優る神々にお仕えするため

地を疎んじ、天に名誉を与えんがため

クレオンに脅迫を受ければ、

惨い死は望むところ

遅すぎるくらいです

そして道理を説かれ、

陛下は王笏が惜しくてポリニースさまを追い立てたのでしょう

何よりわたしはお兄さまを愛していた、だから情愛が神聖な行いをすすめたのです
ふたりで緬いだ言葉がアンティゴヌの首縊りの縄になる。

ではおまえに宿っているその愛とやらの忠告に従うがよかろう、死者たちのもとでポリニースを愛するのだ、わたしの国ではなく

続く第四場でアルジーはアンティゴヌの実妹イスメヌに台詞を譲り、以降、舞台に姿はあるものの話すことはなく、第五幕にはまったく登場しないから、物語はここで完全にアンティゴヌに引き渡されるかたちになる。アンティゴヌが舞台にいない時には、恋するポリニースの恋を語る相手となって彼女の代役を務め、その兄亡き後は自分の夫に成りかわって妹の運命を指し示した。アンティゴヌの悲恋はポリニースの恋なしに、ポリニースの恋はアルジーなしに仕組むことができない。アンティゴヌに用意された最後の不幸は、繰り返すまでもなく、セネカがあのおオカスタにさえ不足だと言った、敵となった人を愛する苦難である。セネカの果せなかった意志はアルゲイアにアルジーのからだを魂を与え、イオカスタとアンティゴナを越える悲劇を完成させようとした。アンティゴヌはふたりの娘に似て、オエディプスはアンティゴナを評する 5)、

おぞましいわが家であって、たぐい稀な孝心の鑑ともいふべきこれほどどこから来たものであろう、一族の者とは似ても似つかぬこの娘は、いったいどこから

おまえだけが、わが家であって、敬虔の心を説くことができる

説得に努める妹を見上げてポリニースは 6)、

わたしの愛しい妹、信仰厚く賢き、エディプの血の誇り、その家の誉れである娘よと呼び掛ける。それより以前、妻と義父にテーブへの宣戦布告を正当化して、いかに気掛かりなアンティゴヌも、決意を揺るがせない、試しにその名をあげている。死にたいと願うオエディプスを引き留めるアンティゴナに 7)、

娘よ、なぜわたしの膝に取りすがって泣くのだ、なぜ、折れることをを知らぬ者を、そのように懇願して折れさせようとする、これこそ、運命がわたしをとらえることができる、わたしの唯一の弱点、ほかの者ならば、けっして折れることのないわたしだが。この辛く厳しい気持ちを、和らげられるのは、おまえ一人だ

ポリニースの最後の抵抗はこうであった、

この世に心残りがあるとしたら、あなただけがそれを取り除いてくれよう。愛しい妹、むしろわたしを罰するがよい、わたしの気持ちが意に添わぬと言われるよりはまし、来てわたしからこの剣を取り上げ、そうだ、来なさい、すぐさまこれでわたしの胸を突き、死なせ

てくれ、あなたに対するわたしの敬意は墓にまで及ぶだろう、わたしは生きて仇を打つことはできぬのだ

そしてオエディプスの抵抗は8)、

おまえが忠実な供なら、この父に剣を渡してくれ、それもわが父を殺害したことで隠れないあの剣だ

わたしには、何であれ、辛くも、悲しくもない、おまえの望みだとわかるものなら。おまえは、ただ命じさえすればよい。(中略)おまえの命とあれば、生きましょう

こうしてアンティゴナが、ウェルギリウスの引用、敗者にとっての救済は生き恥をさらすことではなく、命を救われないこと、すなわち死である、が乗り越えられ、救済としての死を諦めさせる根拠になる。最大の処罰9)、

死にたくない者を死なせるのも、死に急ぐ者を妨げるのも、同罪だ。死を望む者に、死ぬなというのは殺すに等しい。いや、同罪ではない。思うに、死に急ぐ者を妨げるほうが、罪は重かろう

アンティゴナは自分自身は無垢な乙女であって罪人ではないが、敬虔さのためにイオカスタの言う第二の罪、自分以外の人間を罪人にするという過ちを犯している。父は死んで汚名を晴らすことが叶わず、罪人のまま苦痛に身をさらす。すると、乙女は既に無垢ではなかったのだ。イオカスタとアンティゴナは息子と父の説得に成功し、ジョカスト、アンティゴーン母娘の仲裁はむしろ兄弟の対立を際立たせ、死なせてしまう。信仰厚きアンティゴーンは敬虔なアンティゴナの罪を免れる。ポリニースは死んで妹の信仰を護ったことになる。オエディプスが断ち損なった禍根は、エテオクレスではなく、ポリニースが身を捨てて絶やし、アルジーのアルゴスはテーバエの轍を踏まずに済んだ10)。

父を殺して得た王笏を、わたしは捨てた。だが、その王笏は、今また、別の者の手に握られている。わが王国の宿命は、ほかならぬ私が、一番よく知っている。あの王笏を手にする者は、聖い血を流さずにはおかないのだ。父親のわたしの心は、はや、大きな不幸が持ち上がることを予感している。やがて起こるその災厄の種はすでに蒔かれた

悪しき間借り人のわたしは呪われた土地から恋の名のもとに戦いの種をもたらした。あなたの家とわたしが共に掲げた婚礼の炬火は運命に火を点け、あなたがたのすべてを焼き尽くす

アンティゴナは自分を指して、哀れな娘、と言いながら父の同情を引く。アンティゴーンもそうだ11)。

不幸せなわたしにほかに手だてはあるでしょうか

不幸せなわたしがひざについてお願いするのです

この哀れさと不幸の質は異なる。信仰のために罪を犯すことはないが、代わりにその愛情が恋する相手を死なせる。彼女はオエディプス、イオカスタの娘、エテオクレス、ポリュニ

ケスの妹である以上に、エモンの恋人であった。死によってのみ証明される対象を際立たせるのに、他の罪は無用だろう。ソフォクレスはアンティゴネに語らせた 12)、

わたしは憎しみをわけるのではなく、愛をわけると生れついた

と。しかし、すでにポリネースとアルジーを失ったアンティゴヌには共に愛をたたえて歌ってくれるコロスはいないから、孤立無援の戦いが始まる。

- 1) 兄への愛情から、死ななければならない
- 2) エモンを思えば死ぬことはできない、必ず後を追うだろう
- 3) そうなれば愛する人を殺してしまう
- 4) 愛する人を殺すのは愛ではない
- 5) 生きることが良いことだから
- 6) しかし、もし後を追わなければふたりの愛情は偽りになる
- 7) 兄の犠牲を無視して生きていけば、エモンは自分を疑うだろう
- 8) そんな自分を愛する人ではない
- 9) もし愛するなら、自分はエモンを疑う

結局、愛は失われる。エモンがアンティゴヌを愛する条件のひとつが彼女の兄に対する敬愛、愛情であることが問題だ。二つの愛が互いにリンクしあい、選択を拒否する。セネカに似たような展開があったのを思い出されよう。かつては死の断念が生きて償う救済への道を開いた。いずれにせよオエディプスの願いは遂げられるだろう。もしいま、オエディプスの最初の願いを聞き届けてやるとすれば、5) 生きることが良いことだから、を外せばよい。生きてみすみす愛を失うのを見るくらいなら、死んで現世での成就が叶わない、という意味で失う方が心安い。たとえ愛する人を殺し、彼に親不孝をさせる罪を着ることになっても、その罪はひとり、自分にある。同様の論理をエモンが組み立てる予測は簡単につけられる。クレオンが宣告した通り、実はその愛情とやらが彼女を不幸にしているのは明らかなのに、自ら称してためらわない、不幸な娘、すなわち運命に敗れた者は、ウェルギリウスが言うように、命を断ってやる方が救いなのだ。論理上の重大な誤りが隠れていることにお気づきだろう。アンティゴナは父に言ったはずだ 13)、

勇氣とは、お父さま、お父さまのお考えのように、生を恐れることではありません。むしろ途方もなく大きな不幸に立ち向かい、背を向けたり、逃げ出したりしないことこそ、本当の勇氣というもの

愛なしに生きることができないアンティゴヌは勇氣より愛を選ぶ。イオカスタの末裔として敢えて罪を犯し、愛を護るために死ぬが、それはまた救済の死である。ここで愛と死と救済は等号で結ばれる。それ自体が事の発端、原因だったのを忘れて、愛こそが不幸の連鎖を断ち切るというわけだ。ロトルーはセネカが残したディレンマをウェルギリウスの教訓に従って展開してみせた。そこには校訂者に倣うべきいくらかの理由はあろう。だが依然

としてアンティゴヌの言う愛が何であるかは不明だ。死の周辺を取り巻いていた恐怖が愛を囲んではりめぐらされ、転嫁されただけではないのか。恋することを知らず死を選んだ、若きメノイケウスの自己犠牲を彼女は何と名付け得ただろう。

(つづく)

注

はじめに、I

- 1) 拙論、ロトルーのプラウトゥス三部作について、1997年、エイコス XI
- 2) 同、ドン・ベルナルド・カブレールにおける *paraître* の勝利、1994年、エイコス VIII
- 3) *Viollet-le-duc: Oeuvres de Jean Rotrou vol. IV. Notice.* pp. 3-5. 1967. Slatkine Reprints.
- 4) 鈴木美穂、梗概、1990年、エイコス VI. 80-81頁

H. C. Lancaster. *French dramatic literature in the 17th century. Part II. vol. 1-2.* pp. 154-156. 167. 183. 322. 335. 416. 597. 772. 1932 (1966) Gordian Press Inc. New York.

ソフォクレス、呉茂一訳、アンティゴネ、1986年、ちくま文庫、ギリシア悲劇 II、ソポクレス、147-218頁

エウリピデス、岡通男訳、フェニキアの女たち、同 IV、エウリピデス(下)、255-343頁

セネカ、大西英文訳、フェニキアの女たち、1997年、京都大学学術出版会、セネカ悲劇集 I、185-242頁、以下ではエウリピデスと区別するためテーバエの女とする

- 5) セネカ、195頁、訳者注
- 6) 同、訳者解説、442-447頁

II.

- 1) ロトルー、前掲同所
- 2) セネカ、218-219頁、イオカスタ、380-390行
- 3) ロトルー、17-20頁
- 4) エウリピデス、277-278頁
- 5) セネカ、218頁、370-378行、226頁、476行目
- 6) ロトルー、20頁
- 7) 同上、22頁

III.

- 1) セネカ、217頁、367-369行
- 2) ロトルー、47頁、48頁
- 3) 同上、49、50、51頁

- 4) 同上、第四幕第二場、23 頁
- 5) セネカ、193-194 頁、304-310 行
- 6) ロトルー、第二幕第二場、23 頁
- 7) セネカ、212 頁、304-310 行
- 8) 同上、196 頁、100-110 行、212 頁、310-315 行
- 9) 同上、195 頁、90-100 行
- 10) 同上、210 頁、275-280 行
- 11) 同上、202 頁、180-190 行、ロトルー、22、24 頁
- 12) ソフォクレス、176 頁
- 13) セネカ、203 頁、190-200 行

*後半は 2000 年 3 月刊行、中大仏文研究第 32 号に掲載予定

フランス演劇関係古文書資料一覧：1607-1611

戸口 民也

本稿は、本誌第10号と第11号に掲載した「フランス演劇関係古文書資料一覧：1599-1600」および「同：1601-1606」に続くものである。1612年以降の資料もいくつか確認済みのものがあるのだが、フランスにゆく機会が得られぬため仕事が中断したままになっている。そこで、とりあえず作業が一段落したところまでを発表し、あとは機会が訪れるまで待つことにしたい。

**Répertoire des documents relatifs à la vie théâtrale en France
de 1607 à 1611**

Date : lundi 12 février 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 4 (Registre) ; Acte VIIIxxI (161)

Contenu : Bail par la Confrérie de la Passion à Jules Rier et ses compagnons, comédiens italiens

Personnes concernées : Charles Poudrac (doyen), Guillaume Javelle, Jacques Rousseau (Ronneau ?), François le Jeune et Gilles Frenel, maîtres et gouverneurs de la Confrérie de la Passion et Hôtel de Bourgogne ; Jules Rier, comédien italien

Notaires : Haguénier, Huart

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, p.181-182.

A4、3ページ

Date : jeudi 10 mai 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 5 ; Acte VIxxXVI (136)

Contenu :

Personnes concernées : Boniface Butayes, maître peintre, Pierre Gounier(?), Bontault(?),
Boudrier(?)

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Document inédit.

A4、4ページ

Date : jeudi 10 mai 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 5 ; Acte VIxxXV (135)

Contenu : Accord passé entre les maîtres et les anciens maîtres au sujet des loges réservées

Personnes concernées : François le Jeune, Gilles Frenel, Pierre Prévost, Louis le Tessier, maîtres ;
Jehan Grossier, Pierre Dan, Charles Poudrac, Benoist Petit, Pierre Morin, Claude Picollin, Thomas
Blaise, Roollin (Roullin ?) Desmarquets, Jacques Rouneau (Ronneau ?), anciens maîtres de la
Confrérie de la Passion

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*,
tome I, Paris, Nizet, 1968, p.182-183.

A4、4ページ

Date : lundi 6 août 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 6 ; Acte VIxxXVIII (138)

Contenu : Bordeaux にいる Valleran、Gilles de Ruffin を通じ、Hôtel de Bourgogne の賃貸契約
を結ぶ。

Personnes concernées : François le Jeune, Gilles Frenel, Pierre Prévost, Louis le Tessier, maîtres et
gouverneurs de la Confrérie de la Passion ; Fiacre Boucher ; Benoist Petit, Jacques Rouneau
(Ronneau ?), Guillaume Javelle, Reveillon, Ruffin (?)

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Cf. J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire
de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 330, 352. Voir aussi Fransen, *Les comédiens français en
Hollande au XVII^e et au XVIII^e siècles*, Paris, Champion, 1925, p. 48-49.

A4、2ページ

署名の後に追記文書が書き加えられている。Valleran le Conte, François Vautrel, Hugues Guéru, Savinien Bony, Estienne de Ruffin, comédiens ordinaires du Roi ... と記されているのが確認できる。また Gilles de Ruffin の名前も記されている。

Date : 22 septembre 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 17 ; Folio VIcXLVII (647) verso

Contenu : Maché entre Jehan du Val, peintre, et Valleran le Conte, comédien du roi

Personnes concernées : Valleran le Conte, Jehan du Val

Notaires : Cadier (Carrier ?), Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, pp. 189-190.

A4、1 ページのみ。

Date : 8 octobre 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 17 ; Folio VIcIIIxxV (685) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Mathieu Le Febvre, comédien ordinaire du roi ; Jehan des Ditharre(?), marchand

Notaires : Cadier (Carrier ?), Cuvillyer

Note : Document inédit (?)

A4、2 ページ

Date : mercredi 24 octobre 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, registre 7 ; Acte IIIIxxI (81)

Contenu : Second accord entre les maîtres et les anciens maîtres au sujet des loges réservées

Personnes concernées : Jehan Grossier, Pierre Dan, Jehan Mollard, Pierre Toutnier, Vespasien Brosseron, Fiacre Boucher, Claude Picollin, Guillaume Javelle, tous anciens maîtres de la Confrérie de la Passion ; Achilles Bricé, François le Jeune, Gilles Fresnel, Pierre Prévost, Louis le Texier, maîtres et gouverneurs de la Confrérie de la Passion ;

Valleran le Conte, Mathieu Le Febvre

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, p.183-185. Voir aussi : J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 30-331, 352.

Voir aussi Fransen, *Les comédiens français en Hollande au XVII^e et au XVIII^e siècles*, Paris, Champion, 1925, p. 50.

A4、2 ページ。Valleran le Conte と Mathieu Le Febvre の名前が文書中に記されており、二人がこの時期 Hôtel de Bourgogne で上演していたことが確認できる。

Date : vendredi 23 novembre 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, registre 7 ; Acte IXxxXV (195)

Contenu :

Personnes concernées : Fiacre Bouchet

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Document inédit.

A4、2 ページ

Date : 1er décembre 1607

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 17 ; Folio VIIIcXXVI (826) recto et verso

Contenu : Acte d'association d'une troupe de comédiens du roi sous la direction de Valleran le Conte

Personnes concernées : Valleran le Conte, Nicolas Gasteau, Estienne de Ruffin, Hugues Guéru, Savinien Bony, Loys Nicyer, Julien Daureille, Rachel Trépeau, une autre comédienne dont le nom n'est pas marqué

Notaires : Cadier (Carrier ?), Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, pp.190-191. (*Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, pp.185-186. ただし最後の部分が省略されている。)

Date : 21 février 1608

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 18 ; Folios CXIII (113) recto et verso, CXIII (114) recto

Contenu : Acte d'association de la troupe de Mathieu Le Febvre

Personnes concernées : Mathieu Le Febvre, François Le Vautrel, Aubry et Claude Vautrel ses frères, Jacques Maugin, Mathieu Rubé, Robert Guérin, Marie Vénrière femme de Matieu Le Febvre

Notaires : Cadier (Carrier ?), Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, pp.191-193.

Date : jeudi 29 mai 1608

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 8 ; Acte IIcXL (240)

Contenu :

Personnes concernées : Jehan Grossier, Benoist Petit, Nicolas Réveillon, Jacques Ronneau, Frenel, Javelle, Claude Picollin, Le Jeune, Desmarquets, Sébastien Gauvin (Gaunin?), Pierre Morin, Brosseron.

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Confrères de la Passion の協定書 accord のようである。

A4、1 ページ。

Date : jeudi 29 mai 1608

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 8 ; Acte IIcXLIII (243)

Contenu :

Personnes concernées : François Le Jeune, Gilles Frenel, Benoist Petit, Claude Picollin, Nicolas Réveillon, Javelle, Desmarquets, Jacques Ronneau, Sébastien Gauvin (Gaunin?), Pierre Morin, Brosseron, etc.

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Cf. J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 331, 352.

A4、3 ページ

Date : jeudi 29 mai 1608

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 8 ; Acte IIcXLIII (244)

Contenu : Accord entre les maîtres et les anciens maîtres au sujet de l'argent provenant des loges réservées

Personnes concernées : Achilles Bricé (doyen), Pierre Prévost, Louis le Texier, Pierre Gaultheror ; Jehan Grossier, Pierre Dan, Benoist Petit, Pierre Toutnier, Claude Picollin, Rollin Desmarquets, Jacques Rouneau (Ronneau ?), Guillaume Javelle, Sébastien Gauvin (Gaunin?), Nicolas Réveillon, François le Jeune, anciens maîtres de la Confrérie de la Passion

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, p.187-188. (同書では、Coteについては fond X としか記されておらず、また acte は CCXLIII — 243 — と記されているが、正確には fond X, liasse 8 ; acte IIcXLIII — 244 — とすべきである。)

A4、3 ページ

Date : 24 mars 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 19 ; Folio IIcXXXV (235) recto et verso

Contenu : Acte d'apprentissage de Sidrac Petit-Jehan

Personnes concernées : Valleran le Conte, Sidrac Petit-Jehan 15 ans, Thomas du May marchand et bourgeois de Paris

Notaire : Cuvillyer

Note : Analyse du document dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.193.

Date : mardi 7 avril 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 9 ; Acte XIX (19)

Contenu : 受難劇協会のメンバーとヴァルランとの契約

Personnes concernées : Maîtres de la Confrérie de la Passion — R...Brisson, ***, Louis le Tessier, Pierre ***, ***, (何人か名前が読みにくい) , Charles Pudrac, Claude Picoullin, Rollin Desmarquets, ; Comédiens — Valleran le Conte, Claude Husson, Savinien Bony, Hugues Guéru, Estienne de Ruffin, tous comédiens ordinaires du roi

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Cf. J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 332-333, 352.

A4、4 ページ

Date : 8 avril 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 19 ; Folios IIcIIIxxVIII (288) verso, IIcIIIxxIX (289) recto

Contenu : Acte d'apprentissage de Pierre Le Messier

Personnes concernées : Valleran le Conte, Jacques Le Messier sergent au baillage et siège présidial de Senlis, Pierre Le Messier son fils

Notaires : Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.193-194.

Date : mercredi 1^{er} juillet 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 10 ; Acte V (5)

Contenu : 受難劇協会のメンバーと Daniel Duguéら俳優たちとの契約

Personnes concernées : Maîtres de la Confrérie de la Passion (受難劇協会のメンバーが記されているが名前は読みにくい) ; Comédiens du roi qui se nomment "Loyaux Bravelestes" : Daniel Dugué dit La Chesnaye, Jehan Valliot, Gabriel du Verdier, comédiens du Roy (文書からは Daniel Duguéのほかは名前が読みにくいだが、Fransen に従う)

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Voir J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, p. 333, 352.

A4 2ツ折4ページのうち、後半の3-4ページ。欄外に細かい字で—ほとんど読めない—びっしりと追記あり。

Date : 18 juillet 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 19 ; Folios VcLXVI (566) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Callais Anquetif et Jehan Valliot, comédiens français.

Notaires :

Note : Document inédit.

A4、2 ページ（手違いで 566 verso がマイクロフィルムに収められていなかった。要再手配）

Date : 18 juillet 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 10 ; Acte IIIIxxIII (83)

Contenu :

Personnes concernées : Maitres de la Confrérie de la Passion（名前は読みにくい Jacques Ronneau, François Le Jeune, Gilles Frenel, Guillaume Javelle などの名前がある）； Mathieu Le Febvre, Robert Guérin（署名あり）, (? 本文中に Mathieu Le Febvre dict la porte と読める箇所あり)

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Voir J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 333, 352.

A4、3 ページ

Date : 29 août 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 19 ; Folios VIcIIIxxIII (684) verso, VIcIIIxxV (685) recto

Contenu :

Personnes concernées : Mathieu Le Febvre, valet de chambre de Monseigneur le Prince de Condé, Georges Buffequin(?)

Notaires : Cuvillyer

Note : Document inédit.

Date : 3 septembre 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 19 ; Folio VIIcVIII (708) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Mathieu Le Febvre, Marie Vénrière sa femme

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Document inédit.

Date : jeudi 8 octobre 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 11 ; Acte XXXV (35)

Contenu :

Personnes concernées : Valleran le Conte, comédien français ; Thomas Cau***, maître frippier ;
une autre personne dont la signature est illisible

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Document inédit (?)

A4、2 ページ。

Date : 26 octobre 1609

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 19 ; Folios VIIIcXLI (841) verso, VIIIcXLII (842) recto et verso

Contenu : Acte d'apprentissage de Jehanne Crevé

Personnes concernées : Valleran le Conte, Jehanne de Vancour sa femme, Jehan Crevé cordonnier,
Jehanne Crevé sa fille

Notaires :

Note : Analyse du document dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet,
1972, p.194.

Date : 19 décembre 1609 (Deierkauf-Holsboer は 9 décembre としているが、実際には 19
décembre)

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 19 ; Folio IXcLIII (953) recto et verso

Contenu : Acte d'apprentissage de Judicq Le Messier

Personnes concernées : Valleran le Conte, Jacques Le Messier huissier au baillage de Beauvais, Judicq Le Messier sa fille

Notaires :

Note : Analyse du document dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.195. (Deierkauf-Holsboerは9 décembreとしているが、実際には19 décembreの間違いというふうに、Archives Nationalesで実際に文書にあたっていた時に注記したのだが、肝心の日付けが記されている953 versoがArchives側のミスで、マイクロフィルムに間違っったページが収められていた。再度手配する必要あり。)

Date : 15 janvier 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folio XXXVI (36) recto et verso

Contenu : Acte d'apprentissage d'Elezabel Diye

Personnes concernées : Valleran le Conte, Symon Diye et sa fille Elezabel

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : **Note** : Analyse du document dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.195.

36 recto の余白に書き込みあり。15 sept. 1610, Désistement de l'apprentissage か? Cf. Alan Howe, « Couples de comédiens au début du XVII^e siècle : Le cas de Nicolas Gasteau et Rachel Trépeau », *Revue d'histoire du théâtre*, 1981-I, p. 18 et n. 11.

Date : 28 janvier 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios CX (110) verso, CXI (111) recto et verso

Contenu : Acte d'association de Valleran le Conte et de Mathieu Le Febvre

Personnes concernées : Valleran le Conte, Pierre Le Messier, Judicq Le Messier, Mathieu Le Febvre, Marie Vénrière

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.195-197.

Date : 3 février 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 12 ; Acte CXIII (113)

Contenu : Valleran le Conte と Mathieu le Febvre、Confrères de la Passion と契約

Personnes concernées : Valleran le Conte, Mathieu le Febvre ; les Confrères de la Passion dont Benoît Petit, Poudrac, Le Jeune, etc.

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Voir J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 333-334, 352.

A4、3 ページ。内容未確認（Confrères de la Passion との契約のようである）

Date : mercredi 17 mars 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios IIcXXXVII (237) recto et verso

Contenu : Promesse de Jehan Brilloit, voiturier, à Mathieu Le Febvre et à Valleran le Conte

Personnes concernées : Valleran le Conte, Mathieu Le Febvre, (Jehan Brilloit déclare ne savoir écrire ni signer)

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.197-198.

Date : 29 mars 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios IIcLXXI (271) verso, IIcLXXII (272) recto et verso

Contenu : Acte d'association d'une troupe de comédiens de Valleran le Conte

Personnes concernées : Valleran le Conte, Savinien Bony (sans signature), Marie Vénière, François le Vautrel, Estienne de Ruffin, Hugues Guéru, Robert Guéruin, Pierre le Messier (sans signature).

Notaires : Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.198-201 ; Voir aussi S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, p.188-191.

余白に次の日付けの文書が書き加えられている。

10 juin 1610 : Mathieu Le Febvre, Nicolas Gasteau, (Rachel Trépeau) この契約に同意。

3 avril 1610 : Loys Nicssier この契約に同意。

8 avril 1610 : Savinien Bony この契約に同意。

4 septembre 1610 : Rachel Trépeau (Nicolas Gasteau)この契約に同意。

Date : 3 avril 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios IIcLXXI (271) verso, IIcLXXII (272) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Loys Nicssier

Notaires :

Note : 29 mars 1610 の書類の余白に書き込み、契約追加承認

Date : 8 avril 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios IIcLXXI (271) verso, IIcLXXII (272) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Savinien Bony

Notaires :

Note : 29 mars 1610 の書類の余白に書き込み、契約追加承認

Date : jeudi 22 avril 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 13 ; Acte LXVII (67)

Contenu :

Personnes concernées : Valleran le Conte, Confrères de la Passion (2人署名)

Notaires : Haguénier, Huart

Note : Voir J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 334, 352. (受難劇協会との契約に間違いなさそう)

A4、2 ページ。

Date : 10 juin 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios IIcLXXI (271) verso, IIcLXXII (272) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Valleran le Conte, Mathieu Le Febvre, Nicolas Gasteau (Rachel Trépeau)

Notaires :

Note : 29 mars 1610 の書類の余白に書き込み、契約追加承認。

Date : lundi 19 juillet 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 14 ; Acte LXVIII (68)

Contenu : Valleran たち、Hôtel de Bourgogne を借りる

Personnes concernées : Valleran le Conte, Mathieu Le Febvre, Robert Guérin, Hugues Guéru, Jehan Dumayne, Loys Nissier, Estienne de Ruffin, tous comédiens du roi ; Confrères de la Passion dont Richard Champhoudry (?), Jehan de la Cour, Boniface Butays, Jacques Ronneau, Desmarquets, etc.

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Voir J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 334-335, 352.

A4、4 ページ。

この文書には “procuration” (A4 よりひとまわり小さいサイズの用紙 2 ページ) が付属。日付けは samedi 17 juillet 1610 というふうに読める。

Procuration には Mathieu Le Febvre, Robert Guérin, Hugues Guéru, Jehan Dumayne, Loys Nissier, Estienne de Ruffin の名前と署名が確認できる。

Date : 9 août 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XX, 190 ; Acte sans nombre

Contenu : Obligation de Jehan Jacquet à Mathieu Le Febvre

Personnes concernées : Mathieu Le Febvre, Jehan Jacquet maître faiseur d'instrument de musique, Françoise Du Puie sa femme

Notaires : Cuvillyer

Note : Analyse du document dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.202.

A4、1 ページ。

XX, 190 について : 190 から 195 までがひとつの carton に入っている。文書ごとに年代順に積み重ねられている。番号は無し。

Date : 4 septembre 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios IIcLXXI (271) verso, IIcLXXII (272) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Rachel Trépeau (Nicolas Gasteau)

Notaires :

Note : 29 mars 1610 の書類の余白に書き込み、契約追加承認

Date : 15 septembre 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folio XXXVI (36) recto, au marge (15 janvier 1610, acte d'apprentissage)

Contenu : Désistement de l'apprentissage d'Elezabel Diye

Personnes concernées : Valleran le Conte, Elezabel Diye

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Howeによると、acte inéditとのこと。Cf. Alan Howe, « Couples de comédiens au début du XVII^e siècle : Le cas de Nicolas Gasteau et Rachel Trépeau », *Revue d'histoire du théâtre*, 1981-I, p. 18 et n. 11.

Voir l'acte d'apprentissage du 15 janvier 1610 (XV, 20 ; Folio XXXVI (36) recto et verso).

Date : 12 octobre 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folio VIIcLXVII (767) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Robert Guérin, Pierre Guérin (son fils?)

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Document inédit.

Date : 15 octobre 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folio VIIcIIIxxIII (784) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Valleran le Conte, Marie Masson

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note :

Date : 5 décembre 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folio IXcXVII (917) recto et verso

Contenu : Accord entre Mathieu de Roger et Mathieu Le Febvre

Personnes concernées : Mathieu de Roger, Mathieu Le Febvre

Notaires : Cuvillyer

Note : Analyse dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, p.192.

Date : 13 décembre 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios IXcXXVII (927) verso, IXcXXVIII (928) recto

Contenu : Désistement de Nicolas Gasteau de l'association du 29 mars 1610

Personnes concernées : Valleran le Conte, Mathieu Le Febvre, Marie Vénrière, Robert Guérin, Hugues Guéru, Savinien Bony, François le Vautrel, Loys Nissier, Rachel Trépeau

Notaires : Cuvillyer

Note : Analyse du document dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.202-203.

なお Deierkauf-Holsboer は文書の日付けを 30 décembre としているが、次の文書とも 13 décembre と改めるべきである。

Date : lundi 13 décembre 1610

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 20 ; Folios IXcXXVIII (928) verso, IXcXXIX (929) recto et verso

Contenu : Désistement de Mathieu Le Febvre et de Marie Vénrière de l'association du 29 mars 1610

Personnes concernées : Valleran le Conte, Mathieu Le Febvre, Marie Vénrière, Robert Guérin, Hugues Guéru, Savinien Bony, François le Vautrel, Estienne de Ruffin, Loys Nissier

Notaires : Cuvillyer

Note : Analyse du document dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.202.

なお Deierkauf-Holsboer は文書の日付けを 30 décembre としているが、lundi 13 décembre と改めるべきである。

Date : lundi 21 février 1611

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 16 ; Acte VIIxxX (150)

Contenu : Bail de l'Hôtel de Bourgogne .

Personnes concernées : Valleran le Conte, Robert Guérin ; Confrères de la Passion dont Boniface Butays, Poudrac, Le Jeune, Desmarquets, Richard Champhoudry (?), etc.

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Voir J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 335, 352.

Date : lundi 7 mars 1611

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 21 ; Folio IlcVII (207) recto et verso

Contenu : Promesse faite par Valleran le Conte et Jehanne de Wancourt sa femme à Jehan de Mailly

Personnes concernées : Valleran le Conte, Jehanne de Wancourt (déclare ne savoir écrire ni signer), Jehan de Mailly (sa marque)

Notaires : Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.203-204.

Date : jeudi 24 mars 1611

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 16 ; Acte IIcXLI (241)

Contenu : Bail de l'Hôtel de Bourgogne

Personnes concernées : Valleran le Conte, Claude Husson, Guillaume Desforges, Nicolas Gasteau, Rachel Trépeau ; Jehan de Mailly (sa marque) ; Confrères de la Passion dont Boniface Butays, Jacques Ronneau, Richard Champhoudry (?), etc.

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Voir J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 335, 352.

Jehan de Mailly もこの acte に署名 (の代わりにマークをつけている)。

A4、4 ページ

Date : lundi 28 mars 1611

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 16 ; Acte IIcXLIIII (244)

Contenu :

Personnes concernées : Boniface Butays, Richard Champhoudry (?), 1 autre personne

Notaires : Haguenier, Huart

Note : Document inédit.

A4、2 ページ

Date : Mardi 9 août 1611

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XXXIV, 19 ; Folios IIcXLIIII (244) recto et verso, IIcXLV (245) recto

Contenu : Contrat par lequel Alexandre Hardy consent à livrer trois pièces de théâtre, etc... à Valleran le Conte et à ses compagnons

Personnes concernées : Alexandre Hardy poète français ; Valleran le Conte, Claude Husson sieur de Longueval, Jehan Gracyeux, Nicolas Gasteau, comédiens du roi

Notaires : Muret

Note : Cf. Alan Howe, « Bruscombille, qui était-il ? », dans *XVII^e siècle*, oct-déc. 1986, p. 392 et n. 33 ; « Couple de comédiens au début du XVII^e siècle », dans *Revue d'Histoire du Théâtre*, 1981-1, p. 20 et n. 35.

Date : août 1611 (entre les 9 et 11 août 1611?)

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XXXIV, 19 ; Folio IIcXLVI (246) recto et verso

Contenu : Contrat entre Valleran le Conte et autres comédiens

Personnes concernées : Valleran le Conte, Claude Husson sieur de Longueval, Jehan Gracyeux, Nicolas Gasteau, comédiens de sa Majesté

Notaires :

Note : Cf. Alan Howe, «Bruscambille, qui était-il ?», dans *XVII^e siècle*, oct-déc. 1986, p. 392 et n. 34.

この文書自体には日付けも署名もないが、Alexandre Hardy が Valleran に台本を渡す契約をした 8 月 9 日の次におかれており、さらにその次の文書には 8 月 11 日 (木曜) の日付けがあるので、9 日から 11 日に間に作成されたものであることは間違いない。

Date : vendredi 2 septembre 1611

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 21 ; Folios VIIcXLIIII (744) recto et verso, VIIcXLV (745) recto

Contenu : Bail par les comédiens du roi à Morlot d'une partie de la salle de l'Hôtel de Bourgogne

Personnes concernées : Valleran le Conte, Alexandre Hardy, Claude Husson sieur de Longueval, Nicolas Gasteau, damoiselle Rachel Trépeau, Savinien Bony, Jehan Gracyeux, Jacques Mabile, Guillaume Desforges, Sidrac Petit Jehan, tous comédiens du roi ; Claude Morlot bougeois de Paris

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p. 204-206.

Date : lundi 10 octobre 1611

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 21 ; Folios VIIIcXL (840) verso, VIIIcXLI (841) recto

Contenu :

Personnes concernées : Valleran le Conte, vallet de chambre et comédien ordinaire du roi et Jehanne Wancourt sa femme

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Document inédit.

Date : lundi 24 octobre 1611

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 21 ; Folio VIIIcLXXVII (876) recto et verso

Contenu :

Personnes concernées : Valleran le Conte, Sidrac Petit Jehan

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Document inédit.

***Mithridate* ou le double regard**

Yoshiko Hagiwara

Deux représentations de *Mithridate* ont été données à Paris en 1999, année du tricentenaire de la mort de Racine. L'une, il est vrai, était une reprise au Théâtre du Vieux Colombier de la mise en scène de Daniel Mesguish déjà représentée en 1996. La seconde, présentée aux participants au Colloque du tricentenaire de la mort de Jean Racine dans la chapelle de la Sorbonne, était une tentative par Eugène Green pour reconstituer la diction et l'action des acteurs du temps de Racine. Cette année du tricentenaire nous a dotés aussi de précieux instruments de travail sur Racine dont un dictionnaire qui s'intitule ni plus ni moins : *Tout Racine*¹. Si on peut se fier au recensement des « principales mises en scènes » par ce même dictionnaire, on peut ajouter à ces deux mises en scène de *Mithridate* celle d'Anne Delbée en 1993 et celle de Jean Gillibert en 1990. Il semble donc que *Mithridate* qui, il y a encore une dizaine d'années, semblait à peine compter parmi les pièces raciniennes, semble reprendre une place respectable. Surtout si l'on considère le fait que cette dernière décennie ne fut guère racinienne : pour *Phèdre* par exemple, *Tout Racine* dénombre 7 mises en scène dans les années 90 contre 24 dans les années 80.

La pièce préférée de Louis XIV selon Dangeau en 1684², *Mithridate* semble s'être gagné tous les suffrages dès ses premières représentations fin 1672 ou début 73. Même les adversaires de Racine s'en tiennent à quelques remarques d'usage sur les libertés que prend Racine avec l'Histoire. Au siècle suivant encore, en 1770, la pièce de Racine était transformée en livret d'Opéra par Vittorio Cigna Santi et donnée en commande à Mozart adolescent (il avait quatorze ans) pour son premier Opera seria, qui fut représenté à Milan avec grand succès³. Preuve que le sujet, passablement modifié il est vrai, plaisait encore. Mais dès le XIXe siècle, les avis sont partagés et la pièce fait bientôt figure de parente pauvre dans le répertoire racinien. Pièce dans laquelle Racine a eu le tort de vouloir s'égalier à Corneille sur son propre terrain, « la tragédie la moins *tragique* de Racine »⁴, la seule avec *Iphigénie* et *Alexandre* qui finit bien pour les jeunes amoureux, où intrigue politique et intrigue amoureuse se disputent le titre

d'action principale, *Mithridate* est la pièce dont on parle le moins en dehors des deux premières pièces. Comme si les critiques se sentaient un peu perdus, déconcertés devant cette œuvre.

Il y a sans doute un lien entre ces reprises de *Mithridate* et le fait qu'on se fait des pièces de Racine une image moins uniforme, mettant l'accent plus sur la diversité des enjeux que se proposait le dramaturge et surtout moins axée sur le tragique et la fatalité. Georges Forestier insiste, dans son introduction à la nouvelle édition de Racine parue aussi cette année, sur l'arbitraire qu'il y a à vouloir expliquer les pièces de Racine par un tragique calqué sur une définition moderne de ce mot. Il propose d'en revenir à un concept plus conforme à la pratique de ses contemporains, le pathétique.

Pour Racine, le tragique de la tragédie consistait dans l'excitation des émotions propres à la tragédie : pitié et frayeur, comme nous disons aujourd'hui en traduisant Aristote ; pitié et crainte, comme disait Corneille ; compassion et terreur, comme préfère le dire un Racine qui cherchait dans cette préface [celle d'*Iphigénie*], en recourant au lexique chrétien de ses contemporains, à leur prouver qu'on pouvait à Paris retrouver l'esprit d'Athènes. Autrement dit, la tragédie racinienne ne recherche pas le tragique, au sens où nous l'entendons aujourd'hui, mais à proprement parler, le pathétique.⁵

Mithridate, à cet égard, est sans doute la pièce qui répond le mieux à cette esthétique. Et c'était bien cet aspect de la pièce qui était mis en relief dans la mise en scène d'Eugène Green dans laquelle la déclamation prenait un aspect à la fois hiératique et chantant, avec ses « r » roulés et ses rimes plurielles allongées par un « s » prononcé — comme l'étaient d'ailleurs toutes les consonnes finales — et ses « oi » prononcés « oué »⁶. Monime notamment qui était jouée par Anne-Guersande Ledoux, une actrice formée aussi, semble-t-il, à la danse et au chant, semblait parfois sortir tout droit d'un de ces frontispices du XVIIe figurant une héroïne explorée et pathétique. Ce qui ne veut pas dire que les autres personnages ne soient pas pathétiques. Chacun a sa forme de pathétique, *Mithridate* et *Xipharès* bien sûr, mais aussi, on s'y attendait moins, *Pharnace*. Ou du moins, s'il peut paraître abusif de parler à son propos de pathétique, il ne manquait pas d'une certaine noblesse.

C'est sur ce dernier personnage que je voudrais d'abord m'attarder dans cet article, car dans l'histoire de *Mithridate*, roi du Pont, Pharnace est un personnage clé auquel Racine a fait subir un traitement ambigu qui ne manque pas de se répercuter sur la pièce. Rappelons qu'historiquement c'est la révolte de Pharnace, qui cherche une alliance avec Rome, qui accule son père, *Mithridate*, à choisir la mort. Racine a choisi de mettre sur scène un frère rival, *Xipharès*, qui est à la fois un fils fidèle par opposition au traître Pharnace et le rival amoureux de son frère et de son père. Or une lecture attentive amène à constater un paradoxe. Pharnace, le fils traître, se présente à premier abord comme un des rares personnages raciniens, avec *Narcisse*, *Mathan* et *Aman*, qui soient tout à fait mauvais, donc exclus du cercle des personnages tragiques « ni tout à fait bons ni tout à fait mauvais » selon la fameuse formule aristotélicienne. Mais c'est surtout le portrait qu'en font *Xipharès* dans la première scène et *Monime* dans la scène suivante qui fixe pour le lecteur l'image du personnage. *Monime* en particulier l'accable dans les termes les plus violents.

C'est lui, Seigneur, c'est lui, dont la coupable audace
Veut la force à la main m'attacher à son sort
Par un hymen pour moi plus cruel que la mort. (I, 2, v. 144-146)⁷

Et *Monime* de déclarer qu'elle préfère se tuer plutôt que de se donner à Pharnace. Or si cet hymen est « plus cruel que la mort », elle n'en donne guère de raisons. A l'Acte I scène III, *Monime* invoquera devant Pharnace le fait qu'elle tient les Romains responsables de la mort de son père, *Philopœmen*, et qu'elle ne peut donc épouser « l'Allié des Romains » (v. 274). C'est un argument qui a son importance pour l'arrière-plan moral de la pièce. Mais face à *Xipharès*, dans la scène II, *Monime* est plus évasive.

Mais soit raison, destin, soit que ma haine en lui
Confonde les Romains dont il cherche l'appui,
Jamais Hymen formé sous le plus noir auspice
De l'Hymen que je crains n'égala le supplice. (I, 2, v. 153-156)

On le devine, sa haine pour Pharnace vient d'abord de son amour pour *Xipharès*. Pharnace ne s'y trompera pas.

C'est donc miné d'avance par le portrait fait de lui, que paraît Pharnace. Pressant, tel que l'a décrit Xipharès : « en ses desseins toujours impétueux » (v.93), sa galanterie même prend des accents impérieux. Comme dans ces vers célèbres par lesquels il conclut son invitation à Monime de le suivre :

Prêts à vous recevoir mes vaisseaux vous attendent,
Et du pied de l'Autel vous pouvez y monter,
Souveraine des Mers, qui vous doivent porter. (I, 3, v. 240-242)

Cependant, il faut bien le constater, le personnage qui paraît sur scène n'est pas tout à fait cet audacieux dont parlait Monime qui veut « la force à la main » l'attacher à son sort. C'est ce qui frappait dans la mise en scène d'Eugène Green, où le jeu essentiellement déclamatoire laissait à Pharnace le loisir de déployer ses vers somptueux. Alain Niderst disait déjà, « Pharnace est double. [...] Double au point même d'être presque indéchiffrable. Ou peut-être trop riche pour un rôle si court. C'est comme si le Pharnace de Pharnace et le Pharnace des autres étaient mêlés. »⁸ Mêlés, ou plutôt juxtaposés sans se rejoindre vraiment, renforcés ou sapés par opposition aussi. Ainsi l'impétuosité de Pharnace se mesure autant à ses paroles qu'au contraste avec la tendresse et la déférence de Xipharès dans la scène précédente :

Vous voulez être à vous, j'en ai donné ma foi,
Et vous ne dépendrez ni de lui, ni de moi.
Mais quand je vous aurai pleinement satisfaite,
En quels lieux avez-vous choisi votre retraite ?
Sera-ce loin, Madame, ou près de mes États ?
Me sera-t-il permis d'y conduire vos pas ? (I, 2, v. 181-186)

Sans doute, « le Pharnace des autres » peut être pris aussi comme une indication de mise en scène, son discours à Monime étant alors proféré comme une sourde menace. C'est ce que faisait Pharnace dans la mise en scène de Daniel Mesguish. Xipharès restait caché jusqu'à son intervention, rendant plus plausible à la fois son propre silence et le jeu de Pharnace. Il n'en reste pas moins que Pharnace garde une certaine dignité. Ainsi il ne dévoile l'amour partagé de son frère et de Monime que quand il comprend qu'il a été lui-même trahi. Arbate et

Xipharès jouent même à cet égard le rôle d'Œnone accusant Hippolyte et de Phèdre se taisant devant Thésée. Arbate accable Pharnace devant Mithridate tout en l'assurant que « Son Frère, au moins jusqu'à ce jour, [...] dans ses desseins n'a point marqué d'amour » (II, 4). Et Xipharès se tait deux fois : une fois quand Mithridate, persuadé que Monime aime Pharnace, lui confie la garde de sa fiancée (II, 5) ; une seconde fois quand Mithridate fait arrêter Pharnace (III, 3). Il est vrai que la première fois, le silence de Xipharès s'explique par le fait qu'il reste interdit en entendant Mithridate dire que Monime aime Pharnace. Mais justement, il est bouleversé... comme Phèdre apprenant l'amour d'Hyppolite pour Aricie. Subtile et puissante rhétorique dramaturgique qui innocente les uns et condamne les autres.

Pharnace est donc coupable et Xipharès innocent — à tel point que Daniel Mesguish peut même faire de celui-ci une sorte d'ascète oriental⁹ —. Oui, mais le texte recèle d'étranges failles qui font de ces deux frères des personnages « ni tout à fait bons ni tout à fait mauvais », presque à l'insu des personnages eux-mêmes, puisque Xipharès par exemple s'accusera de tous les torts sauf de ceux envers son frère. Décidément, le lien fraternel chez Racine ne joue guère que dans un sens négatif.

De surcroît, si les vers de Pharnace sont voués à une certaine duplicité due à sa future trahison, ils ne contiennent pas moins de très beaux vers. Tels les vers cités plus haut, telles les lignes suivantes sur la lassitude des soldats de Mithridate. C'est toute la longue épopée de Mithridate dont « les seules défaites ont fait presque toute la gloire des plus grands Capitaines de la République, c'est à savoir, de Sylla, de Lucullus et de Pompée »¹⁰ qui revivent en filigrane.

Implacable ennemi de Rome, et du repos,
Comptez-vous vos soldats pour autant de Héros ?
Pensez-vous que ces cœurs tremblants de leur défaite,
Fatigués d'une longue et pénible retraite,
Cherchent avidement sous un Ciel étranger
La mort, et le travail pire que le danger ? (III, 1, v. 881-886)

Argument d'homme lâche sans doute en regard de la morale héroïque, mais émouvant. Et de plus réaliste, car ces lignes, que Pharnace prononce devant Mithridate en faveur de l'alliance

avec Rome, dessinent les motifs de la future débâcle de Mithridate. A l'acte IV, scène VII, Arbate décrit ainsi la sédition menée par Pharnace.

Il a séduit ses gardes les premiers,
Et le seul nom de Rome étonne les plus fiers.
De mille affreux périls ils se forment l'image.
Les uns avec transport embrassent le rivage.
Les autres qui partaient s'élancent dans les flots,
Ou présentent leurs dards aux yeux des matelots.
Le désordre est partout. Et loin de nous entendre
Ils demandent la Paix, et parlent de se rendre.
Pharnace est à leur tête, et flattant leurs souhaits
De la part des Romains il leur promet la Paix. (IV, 7, v. 1429-1438)

Pharnace a donc su tirer de son analyse une stratégie efficace, conforme d'ailleurs au personnage historique qui sut aussi se gagner les gardes du roi. Il faut noter cependant que son évasion et la révolte qu'il soulève contre Mithridate ne sont que rapportées. Racine ne fait plus paraître ce personnage clé sur scène après le début de l'Acte III¹¹.

Est-il abusif de voir ici comme une hésitation, une esquive du dramaturge ? Un malaise qui serait en ce cas partagé par les historiens auxquels Racine se réfère. Car s'ils semblent frappés par la trahison du fils, les circonstances atténuantes ne manquent pas.

Selon Dion Cassius¹², les défaites de Mithridate, son plan trop audacieux d'envahir l'Italie ainsi que diverses calamités poussent ses troupes à la rébellion. Mithridate sévit alors, punissant sur un simple soupçon, des hommes qui n'avaient rien fait et allant jusqu'à faire égorger quelques-uns de ses enfants qui lui étaient devenus suspects. C'est sur ces entrefaites que survient la révolte de Pharnace, qui était, d'après Appien¹³, le fils le plus estimé de son père et son successeur désigné. Il était, nous dit cet historien grec, « alarmé au sujet de l'expédition et du royaume ». Il avait l'espoir d'obtenir le pardon des Romains et craignait que le pays ne soit complètement ruiné par son père si l'expédition en Italie se faisait. Dion Cassius cite, il est vrai, des motifs moins glorieux : la crainte, et l'espoir d'être placé au trône par les

Romains. Mais les deux historiens insistent sur le fait que Pharnace s'est fait des partisans dans l'entourage même de son père. Chez Appien, le grand roi lui-même se laisse dissuader de se venger de lui dans un premier temps quand il apprend sa trahison par un Menophane qui lui expose que de telles aberrations étaient un aspect ordinaire des guerres, et se résolvait quand les guerres arrivaient à un terme. Et Dion Cassius tire cette conclusion qu'il aurait été puni sur-le-champ, si les gardes du vieux roi avaient eu quelque dévouement pour lui. Mais Mithridate, habile dans l'art de régner, ignorait que les armes et le grand nombre de sujets, quand ils n'ont pas d'amour pour leur roi, ne sont d'aucune utilité.¹⁴

Le Pharnace des historiens est donc un personnage au moins aussi complexe et « indéchiffrable » que celui de Racine. Traître par ambition personnelle ou prince réaliste cherchant à mettre un terme aux entreprises suicidaires d'un père acharné qui a perdu l'appui de ses sujets, il semble en tout cas avoir su se gagner l'appui de son entourage et avoir eu une grande audace politique.

Tout était donc possible ou presque avec un tel personnage. D'autant plus, on se souviendra, que Corneille avait même fait d'un prince historiquement parricide le généreux Nicomède que nous connaissons. Dans *La Mort de Mithridate* de La Calprenède (1635), Pharnace, partisan indéfectible de Rome, tenait tête à toute sa famille, père, belle-mère, sœurs et même épouse, qui se donnaient tous la mort. La pièce finissait ainsi sur une véritable hécatombe. Mais Pharnace se rachetait en quelque sorte par un remord déchirant quoique tardif, faisant dire à un certain Abbé de Beauregard :

Quoi que tout l'Univers reproche à cet ingrat,
Pharnace est innocent par maxime d'État,
Ses raisons et ses pleurs ont réparé son crime ;¹⁵

Pharnace innocent par maxime d'Etat ? Ainsi l'alliance avec Rome n'a rien de choquant pourvu que le Père soit pleuré. Ainsi Pharnace a raison !

On s'aperçoit alors que là où La Calprenède en 1635 créait un Pharnace déchiré mais fidèle à son serment de vassal de Rome, là où Corneille, en 1651, instituait un débat entre la politique d'hégémonie de Rome et la liberté conquérante des rois¹⁶, débat dont Nicomède et sa morale héroïque sortaient victorieux, Racine, en 1673, a choisi d'établir d'emblée un univers clos où le

choix des valeurs — du moins apparemment — ne se pose pas. La figure du père, Mithridate, ennemi héroïque et acharné de Rome, domine l'univers éthique et politique de la pièce. La fausse nouvelle de la mort de Mithridate à cet égard rend d'emblée sacrilège toute velléité d'alliance avec les Romains qui sont censés l'avoir tué. La mort du père de Monime, victime lui aussi de Rome, achève de clore cet univers hermétiquement fermé aux Romains — qui ne sont d'ailleurs pas représentés dans la pièce bien que leur présence hors-scène pèse sourdement sur la scène.

On comprend mieux où se trouve l'originalité du Pharnace de Racine. Il se trouve placé dès le début en dehors des valeurs politiques et morales qui régissent l'univers de la pièce. Défini comme étant « dès longtemps tout Romain dans le cœur » (I, 1, v. 25), il ne laisse pourtant voir qu'à mots couverts ses attaches avec Rome. Même dans le grand débat politique de l'Acte III, son argumentation, bien qu'elle débouche sur la proposition de faire la paix avec Rome, se base sur des considérations de politique intérieure, comme nous avons vu plus haut : la lassitude des soldats, la possibilité de sauvegarder ce qui reste. Libre de tout serment de vassalité envers Rome, autant qu'émancipé de toute morale héroïque, Pharnace choisit librement le réalisme et le pragmatisme face à l'entêtement suicidaire, au « tout ou rien » héroïque de Mithridate. Et du point de vue politique, il est évident, comme le dit A. Niderst, que « la « collaboration » que propose Pharnace est une meilleure solution que la brillante et vaine intransigeance du Père. »¹⁷ Dans ses rapports avec Mithridate, pour reprendre une phrase de Roland Barthes, « sa sécession loin du père est accomplie, il en use avec aisance »¹⁸. Mithridate d'ailleurs lui facilite la tâche. Il lui impose un mariage politique contre son gré et l'emprisonne quand il refuse (III, 1 et 2). La révolte de Pharnace est pour ainsi dire un acte d'auto-défense.

Mithridate et sa lutte contre Rome ne sont donc la loi que pour Xipharès et Monime. La soumission au père, pour les deux amants, est absolue. Intériorisé, son pouvoir persiste au-delà de sa présence. Monime accepte le mariage avec Mithridate au nom de la volonté de son père défunt, et la fidélité politique de Xipharès, son désir de venger son père n'est jamais prise en défaut, même contre la trahison de sa mère Stratonice. Et si l'amour de Xipharès est un instant autorisé par la mort supposée du père, le retour de celui-ci ne laisse que le choix de l'obéissance. « Quand mon père paraît je ne sais qu'obéir », (I, 5, v. 366) dit Xipharès.

Pourtant paradoxalement — et contrairement à Nicomède pour qui la morale héroïque est encore viable, pour qui il est encore possible de conquérir des royaumes —, Xipharès et

Monime savent que l'ordre politique de Mithridate est un ordre périmé. Si Xipharès se propose pour la grandiose expédition en Italie, c'est d'abord parce que Mithridate ne peut faire autrement.

Continuez, Seigneur. Tout vaincu que vous êtes,
La guerre, les périls sont vos seules retraites. (III, 1, v. 911-912)

Et il n'a guère d'illusion sur l'issue de cette expédition.

Mais je cherche un trépas utile à votre gloire,
Et Rome unique objet d'un désespoir si beau,
Du Fils de Mithridate est le digne Tombeau. (III, 2, v. 944-946)

Ce n'est sans doute pas un hasard si ce « désespoir si beau » se coule dans un vers cornélien. C'est toute la distance entre Xipharès et un Nicomède qui est mis en relief.

Même sur le plan moral, Xipharès et Monime ne croient guère à l'ordre moral de Mithridate. Ils sont intimement persuadés que leur amour est justifié parce qu'antérieur à celui de Mithridate et parce qu'il est partagé. Leur amour a ainsi pris le pas sur toute autre valeur. C'est pourquoi ils le taisent et le dissimulent : il s'agit de protéger l'autre, de protéger leur secret. L'équité envers un frère, et même la loyauté envers le père le cèdent à cette nouvelle valeur. Pharnace avec sa lucidité habituelle dénoncera cette duplicité.

Mais Xipharès, Seigneur, ne vous a pas tout dit.
C'est le moindre secret qu'il pouvait vous apprendre.
Et ce Fils si fidèle a dû vous faire entendre,
Que des mêmes ardeurs dès longtemps enflammé,
Il aime aussi la Reine, et même en est aimé. (III, 5, v. 994-997)

Mais sur ce plan-ci encore, ils n'envisagent pas de rébellion. Leur soumission est même d'autant plus absolue que leur amour partagé, le Père déchu de sa puissance rend leur piété filiale héroïque.

Quoi ? j'aurai pu toucher un cœur comme le vôtre ?
Vous aurez pu m'aimer ? Et cependant un autre
Possédera ce cœur dont j'attirais les vœux ?
Père injuste, cruel, mais d'ailleurs malheureux !

(II, 6, v. 715-718, c'est nous qui soulignons)

Le pathétique de Xipharès et de Monime se trouve résumé dans ce dernier vers. Ils se soumettent à un Ordre aveugle qui ne veut pas comprendre leurs droits, qui les terrifie et les menace, mais dont ils ne connaissent que trop la vulnérabilité. Leur amour filial est fait de crainte et de pitié, il est déjà connaissance tragique. C'est seulement quand Mithridate viole par ruse le secret de leur amour que Monime se révolte et refuse de l'épouser. Car le sacrifice que lui avaient consentis les deux amants n'a plus de sens si leur secret est dévoilé, si le lien entre père et fils est rompu.

Vous vous êtes servi de ma funeste main
Pour mettre à votre Fils un poignard dans le sein.
De ses feux innocents j'ai trahi le mystère.
Et quand il n'en perdrait que l'amour de son Père,
Il en mourra, Seigneur. Ma foi, ni mon amour
Ne seront le prix d'un si cruel détour. (IV, 5, v. 1365-1370)

On a souvent dit que l'intrigue politique et l'intrigue amoureuse dans *Mithridate* restaient juxtaposées. Sans doute, mais il faut voir aussi que l'intrigue amoureuse dépend du prestige de la figure de Mithridate. Car c'est à cette figure, pourtant déjà condamnée, que Xipharès et Monime consentent de sacrifier et leur vie et leur amour.

Et même de mon sort je ne pouvais me plaindre,
Puisqu'enfin aux dépens de mes vœux les plus doux,
Je faisais le bonheur d'un héros tel que vous. (IV, 5, v. 1336-1339)

La réaction de Monime au revirement de Mithridate qui, devant la mort, consent enfin au mariage des deux jeunes gens, illustre bien cette volonté pathétique de soutenir coûte que coûte l'image d'une gloire passée.

Vivez, Seigneur, vivez, pour nous voir l'un et l'autre

Sacrifier toujours notre bonheur au vôtre.

Vivez, pour triompher d'un Ennemi vaincu,

Pour venger...

(V, 5, v. 1679-1682)

Pharnace et Xipharès. Des deux personnages, aucun ne me semble renié par le dramaturge. Comment peut-on affirmer de Pharnace que « Racine s'en désolidarise absolument »¹⁹ ? Ils portent un même jugement sur la situation de Mithridate. C'est leur choix qui diffère. Il est curieux que les rapports avec le Père soient toujours commentés du point de vue de Xipharès, alors que ce dernier est manifestement une solution au problème que posait le couple Pharnace-Mithridate. Comment mettre en scène la défaite du grand roi et maintenir sa figure de héros ? Quels arguments opposer à la trahison de Pharnace ? Comment concilier, sur le plan de la problématique morale de la pièce, la situation objective d'hégémonie romaine et l'indomptable acharnement de Mithridate ? Enfin quelle intrigue amoureuse, quelle rivalité instaurer entre qui ?

A cet égard, le dédoublement du Fils opéré par Racine semble être comme le reflet du double regard du dramaturge sur l'Histoire. Pharnace, c'est le regard déjà moderne qui juge et qui jauge l'implacable marche de l'Histoire, qui reconnaît la vanité de l'héroïsme des rois, le coût humain exorbitant de leurs guerres, le poids irrésistible d'un pouvoir écrasant, les multiples interprétations toujours possibles. Ce regard pourtant se cache et s'efface pour laisser la place à l'autre regard, le regard de Xipharès et de Monime. Celui-ci, c'est le regard qui suspend le jugement et admire, qui veut se soumettre à une vision archaïque, pieuse, pour mieux admirer, aimer l'Histoire, la beauté et le pathétique de ces images vaines mais terrifiantes, et si puissantes. Double regard qui est à l'œuvre, bien sûr, aussi bien dans la constitution du personnage de Pharnace (les deux Pharnace) que de celui de Xipharès (l'amant et le stratège lucide d'une part et le fils dévoué d'autre part), de Monime (la fiancée sans amour mais soumise) ou de Mithridate (le roi et le père déchu sous le masque du héros légendaire).

Que ce double regard doive quelque chose à la double vision du monde que porte en lui Racine, fils de Port-Royal et de la cour, cela me semble probable. S'il en est ainsi, on conçoit mieux comment il n'a pu rejeter ni l'un ni l'autre. Il s'agit peut-être aussi d'une version racinienne, plus littéraire, plus théâtrale de la « double pensée » prônée par Pascal dans ses *Trois Discours sur la condition des grands* parus en 1670, deux ans avant *Mithridate*. Mais il est sans doute oiseux de vouloir assigner à la figure du Père une signification précise. Roi, maîtres de Port-Royal ou simplement rois de tragédies, la figure de l'autorité sera de plus en plus l'objet d'une pieuse « mise en images », d'autant plus pieuse me semble-t-il que l'autorité a des défaillances.

Notes

1. Jean-Pierre Battesti et Jean-Charles Chauvet, *Tout Racine*, Larousse, 1999, p.440.
2. Racine, *Œuvres complètes*, éd. Georges Forestier, Paris, Pléiade, Gallimard, 1999, p. 1527.
3. *Guide des Opéras de Mozart*, dir. Brigitte Massin, Fayard, 1991, p. 115.
4. Raymond Picard dans son introduction à la pièce, *Œuvres complètes*, Pléiade, Gallimard, 1950, p. 595.
5. Georges Forestier, Introduction aux *Œuvres complètes* de Racine, Pléiade, Gallimard, 1999, Tome I p.XXII-XXIII.
6. Voir G. Forestier, ouv. cité, p. LXIV à LXVII.
7. Les citations de Racine se réfèrent à la nouvelle édition, déjà citée de G. Forestier.
8. Alain Niderst, *Les Tragédies de Racine, diversité et unité*, Paris Nizet, 1975, p.111.
9. Joué par Éric Génovèse, dans un costume qui tenait plus du guerrier japonais que du costume de gentilhomme, et une longue chevelure défaits comme celle d'un samouraï en déroute de Kurosawa.
10. Préface de 1676, 1687 et 1697, *Œuvres Complètes*, p.687.
11. D'où le paradoxe des chiffres cités par Jean Rohou dans *L'Évolution du Tragique racinien*, Paris, C.D.U. et SEDES, 1991 : Pharnace ne prononce que 129 vers contre 580 pour *Mithridate*, 432 pour *Monime*, 340 pour *Xipharès* et même 148 pour *Arbate*, mais « son nom revient comme une obsession : 49 fois » loin devant les autres personnages. (p. 231)
12. *Dio's Roman History*, English transl. E. Cary, London, W. Heinemann, T. 3, Book XXXVII.
13. *Appian's Roman History*, English transl. Horace White, London, Heinemann, 1962 (c.1912), Book XII, p. 451.
14. Dion Cassius, Ouv. cité.
15. Cité dans *Théâtre du XVIIe siècle*, Paris, Pléiade, Gallimard, Tome II, 1986, p.147.

-
16. Corneille écrit sur le sujet de cette pièce: « Mon principal but a été de peindre la politique des Romains au-dehors, et comme ils agissaient impérieusement avec les rois leurs alliés, leurs maximes pour les empêcher de s'accroître, et les soins qu'ils prenaient de traverser leur grandeur quand elle commençait à leur devenir suspecte à force de s'augmenter et de se rendre considérable par de nouvelles conquêtes. » Dans « Au lecteur », Corneille, *Œuvres complètes*, T.II, Pléiade, Gallimard, 1984, p. 641.
17. Ouv. cité, p. 105.
18. Roland Barthes, *Sur Racine*, Paris, Seuil, 1960, p. 107.
19. René Jasisnki, *Vers le vrai Racine*, Paris A. Colin, 1958, Tome 2, p.192.

会員名簿（アイウエオ順）

浅谷真弓	伊藤洋	岩瀬孝	大越敏男	片木智年
小林卓	白石嘉治	神保剛	鈴木美穂	関根敏子
関谷苑子	千石玲子	竹田宏	戸口民也	富田高嗣
野池恵子	萩原芳子	橋本能	浜野トキ	真下弘子
丸山弓子	皆吉郷平			

エイコス XIII

発行日 2000年3月31日

発行者 〒162 東京都新宿区西早稲田早稲田大学教育学部

伊藤洋C/O

17世紀仏演劇研究会 TEL 03-3203-4141

印刷 (有)七月堂

〒156 東京都世田谷区松原 1-38-5 田坂ビル3F

TEL 03-3325-5717

頒価500円